寅子の伊豆旅行

亥袋豊

二〇〇九年の六月五日、熱海行の電車の中で安田浩太は、母親の寅子のむくれ顔にため息をついた。
「せっかくの家族旅行なんだから、機嫌を直せよ」
浩太の言葉に寅子は口を更に膨らませる。まるでフグだ。
「だって、雨が降ってるんだもん。私が出掛ける時はいつも雨！」
六十歳と思えない子供っぽい怒り方をする母を見て、浩太は苦々しく視線を窓に移す。雨は霧雨の様で、薄く電車の窓ガラスを湿らせていた。
「この程度ならすぐに止むよ」
「止んでもらわないと困る。母子で初めての旅なんだから」
安田親子は母一人、子一人で今まで支え合って生きていたが、旅行というものをしてこなかった。寅子はずっとその事を苦にしており、還暦の祝いに、息子に頼み込んで伊豆旅行に行くことにしたのだった。もっとも二人は浜松が住まいだから、県内旅行で日程も一泊二日と短い。それでも寅子はホテルの予約をしたと浩太から告げられた時には嬉し泣きをしたのだった。あんたを産んで良かったと言って浩太を唖然とさせもした。
「ただの旅じゃないのよ。これは吟行なの」
「吟行？」
「私が俳句を詠む旅なのよ。松尾芭蕉みたいに」

「芭蕉に失礼だよ」
浩太の言葉を無視して、寅子は雨にブツブツと文句を言った。
「俳句なら雨について詠めばいいだろ」
「お腹が空いて詠む気にならない」
小学生の様に口を尖らせる還暦の女芭蕉に、浩太は呆れてしまった。

熱海で降りた二人は、商店街にあった寿司屋で早めの昼食を取る事にした。
「好きなものを頼みなよ」
浩太にメニューを渡されて、寅子の頼んだネタは玉子にかんぴょう巻きにカッパ巻きだった。
「もっと高いの頼めよ」
「だって高いの食べ慣れないんだもん」
寅子は外食ではいつも優柔不断で冒険ができない。浩太はそんな母に見切りを付けて、自分は炙りトロ握りを頼んだ。運ばれて来た炙りトロを見て、寅子は頂戴と言って箸を伸ばす。他人が食べている物が欲しくなるのも相変わらずだった。
「別で頼めばいいだろ」
「いいじゃん。あんたの半分、貰う事にする」

下唇を噛む浩太を尻目に、寅子はトロを頬張ると、即席で俳句を詠んだ。
「**梅雨空に　子から頂く　炙りトロ**」
〝盗んだ〟の間違いだろと浩太は内心でツッコんだ。

熱海から伊東線の伊東行に乗った二人は、揺れる電車の音を聞きながら、膨れた腹をさすっていた。
「トイレ行きたくなった。どうしよう」
寅子が不安そうに言う。
「そしたら、最寄りの駅で降りればいいだろ」
「でも、次の電車を待たないといけないじゃん」
「そりゃ、そうだろ」
「せっかくの旅なんだから時間を無駄にしたくない」
「じゃあ、膀胱にでも祈っておきな」
持て余した浩太の言葉を真に受けて、寅子が手を合わせる。
「冗談だ。やめろよ」
慌てて制止する浩太を無視して、寅子は伊東駅まで我慢できますようにと念じ始めた。浩太は恥ずかしかったが、祈りが効いたのか無事に伊東駅まで寅子はもよおす事は無かった。

「**膀胱に　願掛け届く　夏の駅**」

伊東駅のトイレから出てきた寅子が笑顔で句を詠む。

「なんちゅう酷い俳句だ」

伊東駅から伊豆急下田行きに乗り、二人は目的地の伊豆高原に着いた。雨はまだシトシトと降っていたが、深緑の良い匂いが安田親子を包む。木々の間に建てられた洋風の別荘に寅子は目を輝かせた。年甲斐も無くはしゃぐ母を見て、浩太は旅行に連れて来て良かったと思った。タクシーに乗り、二人は予約したホテルへ向かう。寅子は後部座席から外の建物をジッと見詰めていた。早く見て回りたくて仕方がないようだ。タクシーは坂道を上がり、ある建物の前で停車する。

「着きましたよ」

運転手の言葉で安田親子は目の前の建物に視線を向けた。

「病院？」

古く白い建物はホテルというより、ちょっと大きい内科病院に見える。助手席で固まる親子に運転手は気の毒に思ったのか、「確認してきましょうか」と言ってくれた。

「大丈夫です！」

浩太は慌てて礼を言い、代金を払うと母親を引きずってタクシーを出た。

ホテルはかなり年期を感じる佇まいだった。フロントで名前を告げ、部屋に案内される。二人が通された一室は和室で少しカビの匂いがした。

「思ってたのと違う」

抗議するように寅子が浩太を睨む。

「雑誌ではもっと綺麗だったんだよ」

浩太は弁解しながら荷物を置き、外を見に行こうと話題を変えようとした。

「**水無月に　ホテル間違え　母涙**（ははなみだ）」

「別に間違えてもいないし、泣いてもいないだろ！」

廊下を出た安田親子は、他の旅行客とすれ違う。白い旅館浴衣でスリッパの客は、寅子の目にはバリウム検査に向かう患者の様に映った。

外に出た二人は傘を指しながら、周囲を散策する事にした。最初はしかめっ面だった寅子もガラス工芸店やテディベアミュージアムなどを見て、機嫌を直していった。指輪など持っていないのに天使の形をしたガラスの指輪スタンドや熊のぬいぐるみを買ってニヤニヤする寅子を見て、浩太はホッと胸を撫で下ろす。

「結構、楽しいね」

「いい所だよな」
「雨じゃなきゃ、もっといいのに」
「まだ言うか」
ホテルに戻った二人は夕食までテレビを見ていた。同じ静岡でも映る番組がかなり違う。
「夕飯は伊勢海老なんでしょ」
「そうだよ」
「楽しみ！」
寅子は伊勢海老を食べた事が無い。だから今回の旅の目玉が伊勢海老料理だった。時間になり食堂に向った二人はエプロンを付けた給仕のおばさんに名札がある席に行くように促された。置かれた長テーブルはビニールのクロスが掛けられており、昭和の社員食堂を思わせる。不安そうな顔になる寅子を見て、浩太も不安になって来るのを必死に抑えた。
「大丈夫かな」
他の席の人を見廻しながら寅子が小声で囁く。
「黙って待ってろよ」
「ザリガニとか出ないよね」
「シィッ」

料理が運ばれて来たので、浩太は黙る様に人差し指を口の前に立てた。皿には伊勢海老が一匹乗っており、白い刺身が盛り付けてある。味噌汁にも小さな伊勢海老が顔を出しており、漬物とマグロの刺身が小鉢で付いていた。

「美味しそうだ」

浩太が気を取り直す様に話し掛けるが、寅子は伊勢海老の顔に気圧されている様だった。

周りが食べ始める音に寅子は我に帰ると、おずおずと箸を持った。浩太も伊勢海老の刺身を摘まみ、じっくりと見詰める。テレビで芸能人が身がプリプリして美味しいと言っていたのを思い出した。

刺身を口に入れると意外に弾力がある。

「歯応えがあるな」

浩太は期待した手前、固いとは言いたくなかった。味わう様に食べる浩太を見て、寅子も伊勢海老の刺身を口に運ぶ。

「固い！」

「シィッ」

「それに味もたんぱく！」

「声がデカい！」

不平を言う母を叱ると、浩太はイライラしながら白飯をかきこんだ。

「せっかくの伊勢海老なんだから残さず食えよ」
「だって……」
「小鉢ばかり食うな」
「**初めての　伊勢海老料理　歯が立たず**」
結局、寅子の残した伊勢海老の刺身は浩太が全部食べる事になった。

食事を終えた二人はフロント横の土産物コーナーを見ていた。
「ワサビばっかり……」
寅子の呟きを無視しながら、浩太は水槽で泳ぐ伊勢海老を睨む。周りの客も買い物をする訳でもなく、いずようが無さそうに（居心地が悪そうに）ウロウロしていた。
浩太はため息をつくと、諦めた様に寅子に部屋に戻るか尋ねた。
「戻る……」
少し落ち込んだ寅子は、息子の後に続いて歩き出した。二人とも無言だったが、遠くから「露天風呂良かったね」という声を聞いて、表情を変える。
「今の聞いた？」
「露天風呂って言ってたな」

「早く行こう」
親子は部屋に戻ると休憩もそこそこに露天風呂に向った。浩太が男性側の露天に出ると、他の入浴者は居らず、貸切状態だった。雨は止んでおり、立ち昇る湯気の上には星空が広がっていた。浩太はウキウキしながら、備え付けのシャンプーに手を伸ばす。
「馬油のシャンプー！」
物珍しさにボトルの文字を読み、念入りに洗身する。旅の汚れが一気に落ちて行くようだった。風呂の湯加減も丁度良く、浩太は湯に漬かりながら、全身の筋肉が緩むのを感じた。
「**還暦の　疲れを癒す　夏の風呂**」
女湯の方から寅子の下手な俳句が聞こえて来た。

寅子は露天が余程気に入ったのか、二回も風呂に入りに行った。
寅子が部屋に戻ると、浩太が赤ワインのボトルとワイングラスを二つ出して待っていた。
「どうしたの？」
「フロントに注文した。旅先で夜景を見ながらお酒を飲むのが夢だった」
息子の意外な夢を聞いて寅子は苦笑する。何ともささやかな夢だこと。
赤ワインがグラスに注がれ、二人は乾杯する。

「六十年、お疲れ様でした」
「こちらこそ、ありがとうございます」
「これからもよろしくお願いします」
「こちらこそ。あんたも健康に気を付けてね。子供の頃からモヤシッ子だったんだから」
二人は同時に笑うと慣れないワインを舐める様に飲んだ。
「会社、残業が多くて同期が辞めちゃったよ」
「あんたも無理しちゃだめよ。健康なら幾らでもやり直せるんだから」
「……」
「あんたは昔から考えすぎるし、何でも我慢しちゃうからね」
「母さんの性格と半分なら丁度良かったのにね」
浩太の言葉に寅子はケラケラと笑う。
「本当。上手くは行かないわね」
伊豆の夜はとても静かで、寂れた和室に座る母を見ていると、酔いが回った浩太には夢の世界の様に映った。
「避暑の地で　母子で交す　夜の酒」
揺れて映る寅子の笑みを見ながら、浩太はワインを傾けた。

朝になり、早起きの寅子に子供の頃の様に起こされた浩太は大きな欠伸をする。
「顔を洗って来なさい！」
寅子に急かされて、浩太は洗面所にフラフラと向った。寅子は浩太の布団を畳み始める。
「もう帰るのか。一泊なんてあっという間ね」
掛け布団を持ち上げながら寅子は寂しそうに呟いた。浩太も明日からの仕事を思うと気が沈んでいくのを感じたが、振り払う様にゴシゴシと顔を擦る。
「また雨が降って来た……」
窓の外から雨音が響き、木々を揺らし始める。
「朝食食べたら、さっさと帰りますか！」
寅子は髭を剃る浩太に向かって、無理に作った笑顔を向けた。その表情をチラッと見て浩太も同意する。二人は食堂に向かい、朝食の納豆ご飯と目玉焼きを無言で口に運んだ。浩太は口を開くと、旅が失敗だったと言ってしまいそうになるのが怖かった。きっと寅子も同じだろう。
「この目玉焼きとお味噌汁なら私の方が上手いわ」
寅子が浩太を見てニヤリと笑う。
「そうね」

浩太も同感だったので否定はしない。

「**夏の朝　旅館の味に　母が勝ち**」

小声で俳句を詠む寅子を見て、浩太もフフッと笑った。

二人は荷物を纏めるとロビーでチェックアウトの手続きをした。宿泊代は二人で二万七千円。またのご利用お待ち申し上げますと書かれた領収書を浩太は鞄に仕舞う。

「後で半分払うから」

「いいよ。これくらい」

「悪いわね」

申し訳なさそうに寅子は呟いた。ロビーを出ると変わらず雨が降っていたが、二人はタクシーを使わずに歩いて駅まで行く事にした。緑の間の綺麗に整備された道を傘をさしながら歩く。

「二日間、ずっと雨だったね」

「後で思い返せば、笑い話になるよ」

服の裾が湿っていくのを感じながら親子は雨の中を進んで行った。伊豆高原の駅に着いた二人は駅のホームで降り続く雨を見上げる。電車に乗ってからも二人は外の景色をジッと眺めていた。乗り換えの駅では雨が小止みになり、少し晴れ間が見え始めた。

「帰る途中で晴れて来た」
寅子が苦笑する。
「うちの家族らしいじゃないか」
浩太も笑う。
「そうね。如何にも安田家の初めての旅と言った感じでした」
乗り換えの電車に揺られて熱海に着き、東海道線に乗るといよいよ家が近い事を感じる。
「もっとお土産買えば良かったかな」
浜松行きの電車の中で、寅子が呟く。
「今更？」
「優柔不断の寅子様だからね」
「まったくその通り」
暫く電車に揺られていると、アナウンスが流れ、次の停車駅は三島と告げた。
「時間も早いし、寄ってく？」
浩太に訊かれて寅子は首を振る。
「いいよ。次の機会で」
結局、安田親子は寄り道せずに浜松駅で降りると、改札に向かって歩き始めた。

「帰って来ちゃったね」
「あっという間だな」
「でも、ちゃんと旅行して来たのよね」
「色々、予想外だったけどな」
遠鉄の赤電車の中、見慣れた街並みを見ながら、親子は現実に戻って来たような感覚になった。
自宅に戻ると二人は床に座り込む。
「疲れたわ」
寅子が大きく息を吐いた。
「これが、〝やっぱり家が一番良い〟という感じなのかな」
浩太が頭を掻きながら寅子を見る。
「旅行がこんなに疲れるとは思わなかったわ」
「もう旅行はこりごりかね」
浩太の問いに寅子は頷く。
「しばらくは旅も吟行もしなくていいわ」
そう言うと寅子は部屋の窓を開けに立ち上がった。
「旅帰り　我が家を換気　夏の風」

窓から吹き込む生暖かい風を受けながら、浩太は大きな欠伸をした。

伊豆の土産をお互いの職場に持って行き、雨で楽しめなかったと不幸な旅話でお茶を濁した安田親子。二人が仕事に追われているうちに、時間はどんどん過ぎて行き、気が付くと一ヶ月が経っていた。

「もうずっと昔の事みたい」

夕飯の支度をしながら、寅子が浩太に声を掛ける。

「過ぎてみると、もっと色々な場所を見に行けば良かったと思ってしまうよ」

「私も同感。職場の人が伊豆に詳しくてね。勿体無いって言われちゃった」

悔しそうに寅子がコロッケの乗った皿をテーブルに置く。

「初めての旅行なんだから仕方無いよ」

「だからリベンジする！」

「え？」

「また伊豆旅行に行きましょう。今度はもっと良く調べてさ」

そう言って寅子はソースを取りに立ち上がった。

「いつ行くの？」

「来年。伊豆再訪の旅！」

「来年の話をすると鬼が笑うよ」

「伊豆の地に　再訪誓う　夏の晩」

旅の疲れをすっかり忘れた寅子はウキウキしながら、冷蔵庫を開けた。

二〇二四年の六月五日。熱海行の新幹線の中で安田浩太は寅子の膨れ顔を見詰めていた。二回目の伊豆旅行に行くのに安田親子は十五年も掛かってしまったのだ。その間に病気になったり、仕事を変えたり色々な事があったが、今の所、寅子は皺が増え、浩太は髪が薄くなった位が大きな変化だった。

「せっかくの二回目の伊豆旅行なのに、また雨が降ってる！」

七十五歳にしては子供っぽく怒る母を見て、浩太は苦笑する。

「もう諦めな」

「諦めない！」

頬を膨らませる母を見て、浩太はぷっと噴き出してしまう。

「雨で一句詠んだらどうだ。母さん」

「お腹が空いて詠む気がしない！」

「じゃあ、俺が詠むかな」

そう言って浩太は腕を組んで、少し考えてから俳句を詠んだ。

「十五年　再訪叶う　夏の伊豆」

「お見事！」

コロッと上機嫌になった寅子は浩太の句を褒める。

寅子の笑みに釣られたのか雲の間からお日様も顔を出した。

おわり

寅子の伊豆旅行

2023 年 10 月 28 日　発行

著者　玄袋 豊

町制施行 60 周年・かんなみ知恵の和館 10 周年記念事業冊子
発行　函南町教育委員会
製本　函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）
電話番号　055-979-8700
419-0122　静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。
（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の
第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。
作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるもの
とします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は
著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。

母・寅子の還暦祝いで伊豆旅行へ出かけた浩太。浜松から伊東へ初めての二人旅はなかなか思っていたとおりにはならなかったが……。朗らかな母と息子の旅物語。